

有之哉、其段は如何難量候。とかく英氣無之候ては頼すくなく候。拙者前の如く表向の衆へも罷越、手足も痛不申候はゞ罷越、漸々進被申候様にも可仕候處残念に存候。右の日は方々勤被申由、式臺より早く歸り被申候。諸葛亮を昭烈草廬の内へ願被申、天下の大事を尋被申程の大氣量無之候ては、英主とは難申候。前書に申入候か、中村惕齋五經筆記の序出來遣申候。此序文其元へ遣候て、貴殿・藤太夫殿などへ爲見申度候へども、手振難調候間延引致候。賤息眞を調候事不能成候故、かやうの物爲調候事不能成候。以上。

四月九日

一、和泉守・鈴木丹後守の儀室鳩巢來狀

諸侯參勤、前々の通一年交替に被仰出候。是にて米價少し貴く罷成申事の由申候。頃日水野和泉守殿、老中役儀御免被成候。近年病身に罷成、大切の御用自然間違も有之候へば、如何に被思召候間、御免被遊候。緩々養生仕候様に、御前へ被召出御直の上意、且又御腰物被下候。首尾はよく御座候得共、戸田山城守殿は此方より役儀斷被申候得共、

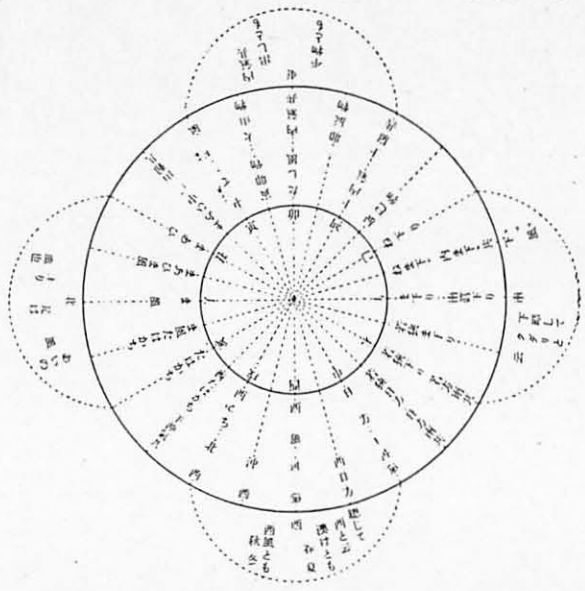
其儘相勤候様に被仰出、死去以後も鳴物など停止にて、規模成事に候。其に合せ候ては、此方より役儀斷りも無之所に御免被成候事、諸人驚申事に候。

榊原家より其後何の間も無之候。如何被致候哉と存候。何とぞ打續學問の志も有之候様に仕度候。此度水戸家不幸の節、尾張中納言様御取持の様子承候處に、乍推參御殊勝御尤成儀共奉感候。委細は筆叶不申候間不申進候。去々年か尾張の家老並の人鈴木丹後守と申人、老夫に逢申度候由被申逢申候。其後國よりも不絶付届け有之、當年も在江戸の内、遠方兩三度被參、學術の儀共疑問に及申候。尾州の衆に承候へば、國にても諸人ほめ申由に候。四十に及候人と見え申、よほど志も有之候様に被存候。國政にも預り被申由に候間、別て珍重存候。そろ／＼見聞仕候内、學の志有之人も見え申候。何とぞ諸侯・士大夫の中に、出來候様に仕度候。申上度事多く候得共、いかにしても手叶不申候て、是さへやう／＼調申候間草々申進候。其外被仰下候儀共、一々不及御返答候。以上。

六月九日

一、金澤の二十四風

賀州金澤にて、二十四風の俗稱あり。有澤惣藏圖之。越中・



能州は又異也。惣藏云。此圖は馬淵友進、宮腰浦奉行の時松雲公御尋に付、海人どもへ承合せ、友進相調上之候圖に

て候旨。

一、楠公贊の儀等室鳩巢來狀

先生御來書  
拙者手足痛は同遍の中、暑氣故に候哉、近頃は一入不宜致難儀候。氣分食事は指て替儀も無之、只今も座敷へ罷出講釋等仕候へ共、立申儀膝のび不申、つよく痛候得共、對客講書候へば氣鬱散じ宜く覺候故、罷出申候。座し候ては氣配如常、長座に講勤候ても少しも草臥不申候。是にて精神は弱り不申、御推察可被成候。

榊原氏へ遣候兩冊御返し受取申候。芦孝七へ被遣候御狀並扇子、共に先日陸奥守殿家來中塚十兵衛と申人へ頼遣申候。もはや達可申と存候。十兵衛と申人兼て不存候處、老夫門人川口庄三郎方迄被參、補正成像に拙者贊を被望候。拙者只今手叶不申候故、庄三郎達て斷申候由。左候はゞ拙作ふるき贊成とも給候へ、他筆にて成とも爲調可申候、其身守りに仕度旨申候由に御座候故、志を感じ候て先年の贊を調遣申候。其時分は手少叶候故、ふるひ／＼調遣候。其後急度麻上下にて禮に被越、始て逢申候。殊の外實跡に見え申人にて御座候。